

日中開戦7

不沈砲台

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

地 挿
図 画
平 安
面 田
惑 忠
星 幸

目次

プロローグ	15
第一章 英雄	22
第二章 出世すごろく	45
第三章 第一六八戦車軍団	72
第四章 戦端	99
第五章 フェアウェイの戦車戦	128
第六章 逐次躍進	155
第七章 海峡侵攻	181
第八章 キャリバーCH	207
エピローグ	225

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 二佐。ようやく傍若無人の上司、同期と離れ、心機一転するつもりだったが？ コードネーム：モンブラン。

原田小隊

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 二曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 二曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口苾太 三曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 士長。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき
吾妻大樹 士長。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

姜小隊

かんあやか
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 二曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

みどうそうま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

い いかける
井伊翔 二曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

あねこうじ きねあつ
姉小路実篤 三曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：

ボーンズ。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：
ニードル。

あかばねたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：
シェフ。

おだぎりしょう
小田桐将 一士。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：
ダック。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊〉

なかわらひろおみ
中村弘臣 一佐。西方普連を率いる。

しばひかる
司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官に異動となった。

おおきこかつひろ
大迫勝弘 二佐。副連隊長。鹿児島県出身で、地元の私大から自衛隊
に入った。

くわたかいと
鋤田海人 三佐。第二中隊情報幕僚。〈歩兵第一三連隊〉鋤田義人の
長男。

きんじょうきとる
金城哲 一尉。偵察班を率いる。一般大から自衛隊に入り、たちま
ちレンジャー資格を取った沖縄県人。コードネーム：クイナ。

〈陸上自衛隊第1師団隷下〉

あかしくにまさ
明石邦正 一尉。第一戦車大隊第一中隊。小隊は、オベロン小隊。指
揮車は“ライサンダー”。

〈陸上自衛隊第一空挺団〉

すずきかつとし
鈴木勝俊 一尉。第二普通科大隊第五中隊本部中隊情報小隊を率いる。
もともとは空挺教育隊の教官。大聖、聖也兄弟の父親。

〈第一二普通連隊〉

たなべしんご
田辺慎吾 二尉。工学部出身の二五歳。小隊を任されたばかり。

うしじましげき
牛島茂樹 一曹。小隊長のお守り役。「シゲさん」と呼ばれ慕われて
いる。

〈第八戦車大隊大隊本部付き情報小隊〉

くわたりとと
鋤田陸人 一尉。第一三連隊の鋤田義人元一曹の次男。

〈女性自衛官教育隊〉

とうけまや
東家麻耶 三佐。元工学部の学生で、第一希望は当時の宇宙開発事業
団だった。

〈特科教導隊第五中隊〉

とみながはる き
富永治樹 二佐。MLRS多連装ロケット・システムを指揮。指揮下にはGMLRSの一個大隊がある。

〈第八後方支援連隊（北熊本駐屯地）〉

いづの あづみ
伊津野杏純 一尉。普段は災害派遣で、被災者に野外入浴セットで風呂を提供する仕事をしている。コールサイン：ガールズ・ワン。

きよさき くみ
清崎久美 二曹。操縦士。

いづの の あ
伊津野乃亜 三曹。砲手。伊津野杏純一尉の妹。

まつふね みか
松舟海香 三曹。弾薬手。

〔海上自衛隊〕

第一航空群

その たろう
曾野太郎 海将補。第一航空群司令。

わかすぎしゅう
若杉秀 一佐。作戦幕僚。

わこう えみ
若生詠美 三佐。情報幕僚。生まれも育ちも鹿屋。父親はP-3C乗り。娘も防大に入りP-3C乗りになった。

〔航空自衛隊〕

みやた ひろゆき
宮田弘幸 空将補。航空自衛隊第五航空団司令。垂水出身で、鹿屋の高校に通って防大に入る。池辺真とは幼なじみ。

いけ べまこと
池辺真 空曹長。要撃管制官。

〔陸上幕僚監部〕

あしはら よしみち
芦原義道 陸将。陸上幕僚監部幕僚副長。

やまぐち いさみ
山口諫実 二佐。装備部需品課。一般大卒の経理畑。福江島出身。

〔海上幕僚監部〕

よないはる お
米納晴郎 海将。海上幕僚長。

《内閣》

あそう しろう まし べしんの すけ
阿相士郎 副総理兼財務大臣だったが、岸部真之輔が総理を辞任後に新総理となった。音無に促されて、サイレント・コアの設立に関わっている。

ごん だひとし
権田均 警視正。総理秘書官。

かとうしやうへい
加藤昇平 官房副長官。警察庁出身。

う ごん きみはる
右近公春 内閣官房。

《外務省》

くしだふみお
櫛田史雄 外務大臣。

いしかわしのぶ
石川恕 中国課長。

《警察庁》

おおいずみまなぶ
大泉学 警視監。警察庁次長。

かあいてつや
河相鉄也 警視正。国家安全保障局に派遣中。右近公春とは学生時代からの付き合い。

ばばけいじ
馬場啓治 警視。長崎県警本部管理官。

きさはけいすけ S A T
笹原啓介 警部補。警視庁特殊急襲部隊副隊長。

みきたけい S I T
三木谷啓 警部補。特殊犯捜査第二係。人質交渉人。

《熊本県》

うらしまわつみ
浦島睦実 熊本県知事。農協職員として渡米中に学問に目覚め、ハーバードで博士号を取り帰国した変わり者。

《歩兵第一三連隊》

いせりそうた
井芹奏汰 陸将。陸上自衛隊元幕僚長。

むらまつけいすけ
村松啓介 陸将。井芹から幕僚長に任命される。

くわた よしひと
鍬田義人 元一曹。連隊本部付き情報小隊の分隊長。水俣出身。子供は二人とも自衛隊員。

《福岡県》

おがわひろし
緒川博 福岡県知事。元内閣広報官。

《鹿児島》

ありむらいたいぞう
有村泰蔵 鹿児島県知事。戦闘機パイロットになりたくて、防衛大学校に入った。警戒隊出身。

たにかわしんじ
谷川真治 元一尉で秘書課に所属。

《歩兵第二二七連隊》

ひだかひろし
日高博 陸将。中央即応集団司令官、また北海道で普通科部隊の連隊長を務めていた。

にいどめはやと
新留隼人 元陸将補。幕僚長。

いちまるたくや
市丸卓也 元一佐。歩兵第二二七連隊第二中隊を指揮する。

つまがりむつき
津曲睦己 元二佐。

くぼぞのけいぞう
窪園啓蔵 元曹長。市丸がもっとも信頼している下士官。

中国

[政治委員]

ファンチエンチオン

方建中 少将。戴志強中將とは子供の受験で確執があった。

タオチンチエン

陶景臣 大佐。政治委員補佐。南海艦隊から異動してきたばかり。

《海軍》

[東海艦隊司令部]

タイチイアアン

戴志強 中將。東海艦隊司令官。清廉潔白な人物。

スンルンシオン

孫潤生 少将。東海艦隊参謀長。艦隊ナンバー3。

カンウェンホア

康文華 大佐。東海艦隊情報参謀。

シュイチオンピン

徐正平 大佐。作戦参謀。

[陸戦先鋒第44旅団]

クッチイアアン

顧家強 大佐。旅団長。

ソンチイミン

宋啓明 中佐。陸戦先鋒第44旅団・旅団司令部付き中隊を率いる。

ルオティエンユイ

羅天宇 六級士官。下士官を束ねる。

《陸軍》

[第16空挺軍団]

トゥヨンシン

杜永新 大佐。第16空挺軍団第145空挺連隊を率いる。

シャオイエンチュ

邵彦祖 中佐。副連隊長兼政治将校。

スンリイリイ

孫麗麗 中佐。作戦参謀。事実上のナンバー2。司馬光二佐の因縁の相手。

リュチエンフエイ

盧劍飛 中佐。連隊情報参謀。

イエンシュエハイ

嚴学海 少佐。第一中隊を率いる。

旅団付き攻撃ヘリ部隊

タンチュン

唐君 中佐。飛行中隊を率いる。杜永新大佐とは、過去何度か演習で一緒に組んだことがある。

ツワンハオティエン

曾昊天 大尉。連隊本部付き偵察小隊を率いる。

リュイユイタン

呂語堂 中尉。Z-19攻撃ヘリコプター“黒旋風”後席操縦士。

ウェイムクン

韋慕青 少尉。編隊に参加した兵士で唯一の女性パイロット。

モオリイチュワン

莫立城 三級士官。

[第七戦術機動師団]

ホヱレイ
何雷 少将。第七戦術機動師団を率いる。

チアンチュウオ
江卓 大佐。参謀長。

チュウチン
朱琴 中尉。大学出の女士官で、通訳を担当する。

《空軍》

パイウエイトン
白衛東 空軍中將。中国空軍九州軍管区司令官。

ロンホイ
龍輝 中佐。

[空挺]

ワンウエン
汪文思 大尉。一個歩兵小隊を率いる。

クオイーファン
郭一凡 中尉。小隊副指揮官。

チョウチワンハオ
周正豪 伍長。分隊長。

ハントン
韓童 曹長。小隊のベテラン。

ユイファン
余凡 中尉。対空自走砲を率いてきた。捕虜になったが「人民解放軍の誉れ」と言われている。

//////アメリカ//////

〈海軍第七艦隊〉

ロバート・B・ワイズナー 司令官。海軍大将。アメリカ太平洋軍司令官。日本人の血が入っている。

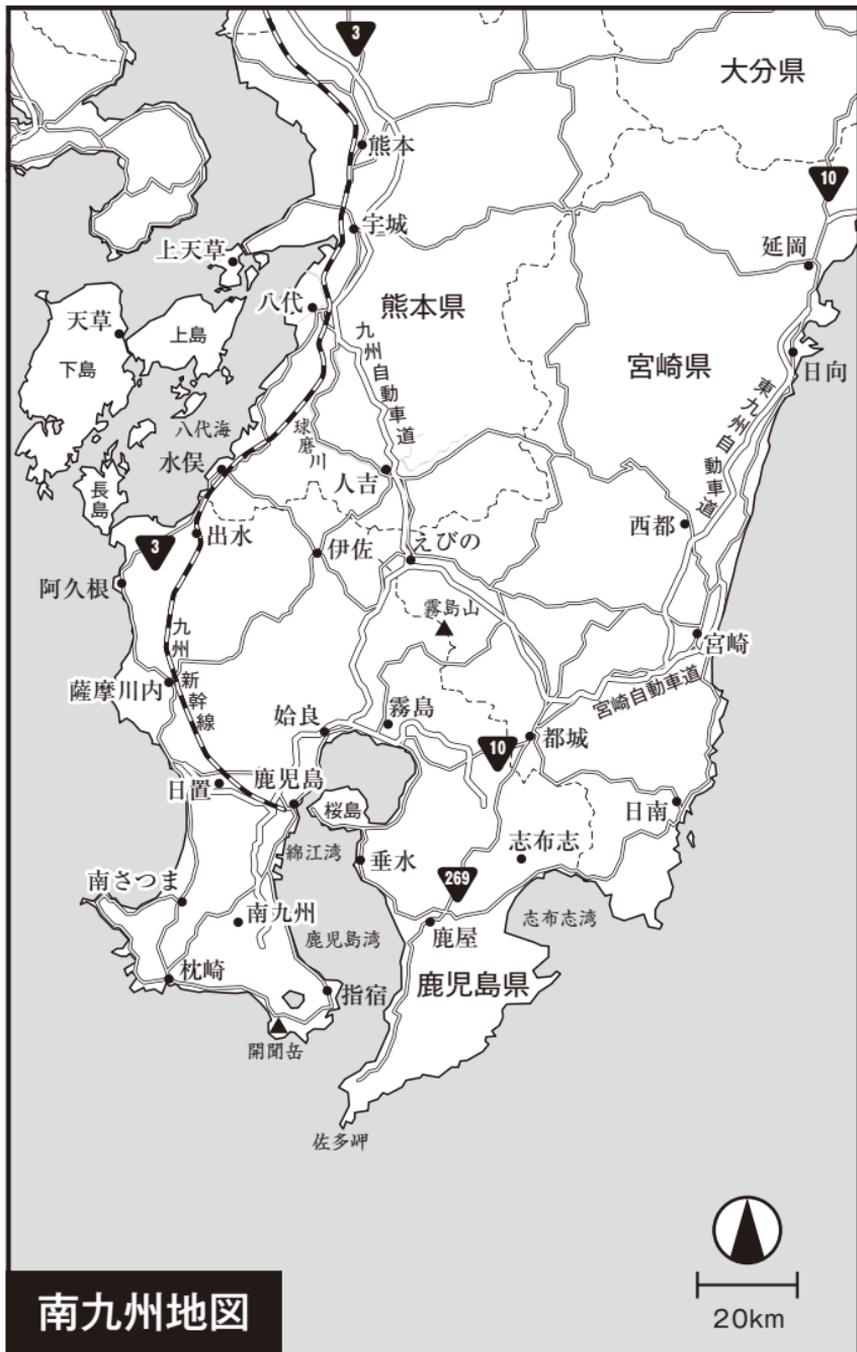
サミュエル・シド 大尉。副官。

クリスティン・スルー 大佐。“グリーン・ベイ”艦長。身長一六五センチの女性。

ダグラス・ガーバー 中佐。副長。

エンリケ・ロドリゲス 最上級曹長。

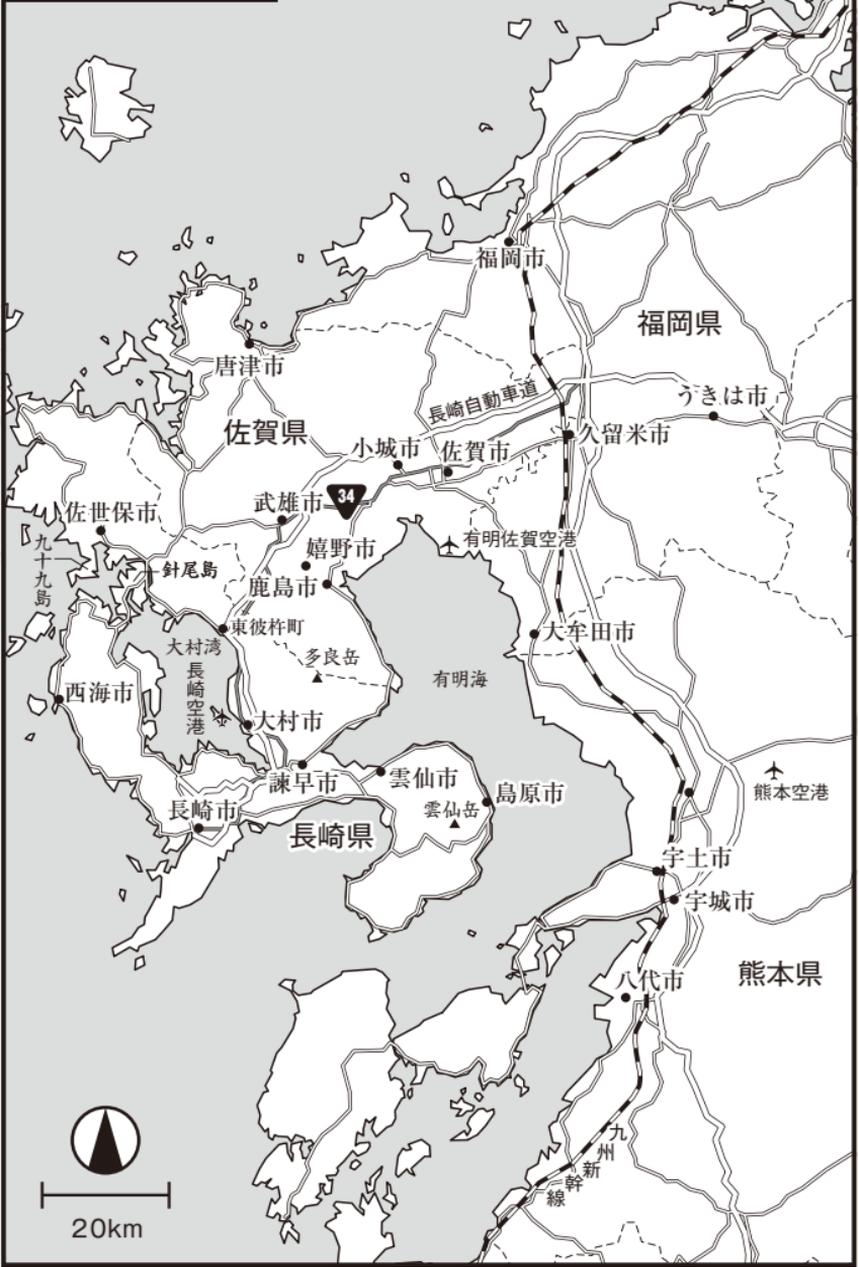
コリン・サマーズ 中佐。海兵隊の一個中隊を率いて乗り込んできた。



南九州地図



北九州地図



日中開戰了

不沈砲台

プロローグ

宮崎県中部にある太平洋に面した航空自衛隊・新田原基地周辺は、灯火管制のため暗闇に包まれていた。

潜入スパイの連絡を阻止するために、携帯や電話網も落としてある。基地の周辺住民も、外との連絡を取るには、宮崎県警が敷いた検問を通る必要があった。

数日前、新田原基地を出発した鹿児島県出身隊員からなる陸戦部隊は、その任務を立派に果たし帰還した。

たかだか二〇〇名前後の兵力で、出水平野に降下してきた方を越える兵士を背後から襲撃して引

き留め、それを壊滅させることに貢献したのだ。

だが、犠牲も大きかった。

部隊を率いた鹿児島県出身の団司令宮田弘幸が戦死し、遺体になつての帰隊となつた。

しかし、帰還するにも時間がかかった。高速や下の道路では、北海道や本州から海路到着した部隊の前進を優先するため、あちこちで停止しなければならなかつたのだ。

終いには、陸自都城基地まで辿り着いたところで、トラックやバスを貸せということになり、そこで二四時間、足止めを喰らつた。

JRは、敵の攻撃目標になることを恐れて運行

を停止しており、燃料入手の目処も立たなかつたので、悔しいが、休息と割切つて皆テレビやラジオに繋り付いた。

そこで、持ち帰る予定の遺体は簡単な検死解剖を受け、ボディバッグから棺へと移された。

陸自は、車両を徴発したお礼として、新田原に送り出す時は、ちゃんとした自衛隊の車両に乗せ替えてくれた。

それまでは、民間から借り受けた観光バスやダンプカーまで使つて移動していたのだ。

また、基地に残る隊員らが正門まで整列し、儀仗隊の榮譽礼付きで送り出してくれた。

彼ら都城部隊の主力は今、八代におり、山中に逃げた敵兵士の山狩りを予定している。

犠牲は払つたが、熊本と鹿児島島の県境で発生した戦闘は、自衛隊の勝利で幕を閉じようとしたのだ。

その夜、新田原基地の正門ゲートでは、ドラム缶にくべられた薪が赤々と燃えていた。

基地内の電力は完全に復活していたが、基地を見張るスパイを欺くため、停電を偽装していた。

基地に残つた隊員らが出迎えてくれたが、皆、正門前から両脇に整列していた。

恰好は統一を欠いていた。作業服姿の隊員もいれば、戦死した団司令を迎えるために礼装姿の隊員もいる。

車列は、正門に入ると、速度を落としてゆっくりと進んだ。数日前、戦死した団司令の宮田弘幸空将補が最後に演説した業務棟裏の空き地に到着すると、トラックから彼の棺が降ろされ、日の丸の旗がかけられた。

滑走路側からは、複数の重機が走り回る力強いエンジン音が響いている。

この基地は開戦当初、大陸から放たれた空母攻



撃用の弾道弾ミサイルが着弾し、滑走路が破壊された。復旧は容易だったが、復旧してもまたミサイルを喰らうだけだとわかっていたので、迎撃態勢が整うまでそのままにされていたのだ。

基地警備小隊を率いて出撃した中村信治一尉が、副司令の中武大輔一佐に帰隊の報告を入れた。

「勝ちはしましたが、無念であります。……空将補を、守り切れませんでした」

「ご苦勞だった、一尉。しかし、団司令はご満足だったと信じたい。自分の故郷を、自らの手で守り切ったのだからな」

指揮台を囲むようにも、松明が燃えていた。その前に、戦死者の棺が並べられた。全部で一四人分。

副司令が、出撃した隊員の中でもっとも年長で、かつ団司令とは幼なじみだった池辺真空曹長に、一言訓示するよう命じた。

池辺は、拡声器を持って指揮台の上に登ると、小さくため息を漏らした後、そこに整列する四〇〇名前後の隊員に向かって口を開いた。

「……自分も、団司令も、こういうスピーチは苦手な方で。……やっと帰って来られた。残念ながら、全員無事というわけにはいかなかったが。鉄砲を担いで、山の中、川の中を走り回る苛酷な戦いだった。敵は、どう見てもこちらの一〇倍。

よく、これだけの犠牲で済んだと思う。言うまでもないが、故人を悼んでいる暇はない。滑走路の復旧を急ぎ、ここを長崎への反攻作戦の拠点とする必要がある。今日まで、みんな良く頑張ってくれたが、夜が明けたら、ここは本来の空自基地機能を完璧に取り戻して動かねばならない。あと一踏ん張りだ。敵を東シナ海に叩き落とすまで、頑張ってくれ！」

指揮台から降りると、池辺は中武に「奥さんは

見つかりましたか？」と尋ねた。

宮田空将補の戦死を伝えるべき相手——彼の奥方は現在、行方不明になっていた。

入間基地に近いマンションで家を守っているはずだったが、基地関係者が弔意を伝えるに訪ねたところ、応答がなかったらしい。まあ、池辺は彼女とも同じ集落出身で、幼なじみの間柄なので、自分が実家に連絡を取らないでもなかったが。

「そのことなんだが、奥さんは実は、あっちにはいなかったらしい。川内せんだいにいる」

「せんだい？ 東北の仙台せんだいですか？」

「とんでもない。こっちの川内せんだいですよ！ それが行九州出身自衛官家族の中に、旦那の後方支援を行うボランティア部隊が立ち上がったらしくて、奥さんは、関東一円で旦那を単身赴任させている幹部の、女房族を纏めて九州に上陸しようです」

「まさか!? 橋は落ちて、フェリーも止まってい

るのに……」

「方法は良くわかっていないんだ。OBが、趣味で飛ばしているセスナの類を出してくれたという噂も、あるにはありますが……。それで、今は川内せんだいで義勇兵部隊の炊き出しをしているらしい。その情報が鹿児島県知事の耳に入った。あの二人は家族ぐるみの付き合いだったから、県知事が早速、川内せんだいに弔問に向かいました。知事は、空曹長から最期さいごの様子を聞いていたから、それを奥方へ伝えようです。……旦那の最期が、空曹長の腕に抱きかかえられて死んだと聞くと『きつと、彼も本望だったことでしょう』と、気丈に応じたそうですよ」

「……まあ、あいつがパイロットになると決めた時から、墜落事故の一報に備えてきた相棒あいはらのような存在でしたからね。そのあたりは、しっかりしている。この三〇年、その第一報を伝えるのは、

俺の役目になると思っていた……。それが、地上で戦死なんて、皮肉なもんだ。さて、それで基地の復旧の方は、どうなんですか？」

「問題ない。夜明け時には、滑走路は完全に復旧する。管理棟も爆風で窓ガラスが全部吹き飛んだが、必要な所の掃除はすでに終えた。防空は、ペトリのPAC3部隊が配置についているし、沖合には、弾道弾対処のイージス艦もいる。戦闘機部隊や巡航ミサイルが殺到しても、陸の防空任務部隊も配置についています。防空は鉄壁です。三〇一飛行隊はまだ小牧だが、いざ出撃となったら、この新田原基地から出撃したいという要望を出しており、それは適えられるでしょう。もちろん、ここの維持と防空がそこそこ行けるとなったら、イーグル部隊もこちらに展開してきます。海自鹿屋基地も、われわれと同時に完全復旧する。そうなれば、長崎から福江島方面の制空権を完璧

に取り戻して、敵の海路補給も絶てる。この戦争は、あと二日もあれば終わるでしょう。……これも、戦死者の尊い犠牲のお陰だ。しばらくは、ゆっくり休んでください」

「いや、休息なら、都城でたっぷりしましたよ。死んだ連中の仇は、空でとってもらわなきゃならない。頑張りましょう！」

中国要人の子弟を乗せた修学旅行の旅客機爆破から、十一日を迎えていた。

中国軍は、まず五島列島の福江島に上陸し、そこを拠点に長崎へと上陸。

関門大橋や関門トンネルを破壊して、九州を孤立させた上、熊本県八代に新手の部隊を上陸させた。

しかし、ようやく反撃の態勢を整えた自衛隊は、

自衛隊OBからなる義勇兵部隊の活躍かつやくもあつて、
敵をほぼ殲滅せんめつ。

いよいよ、長崎奪還へと向け、行動を開始しよ
うとしていた。

第一章 英雄

中国陸軍の汪文思^{ワンウェンシ}大尉は、まどろみの中にあつた。

瞼^{まぶた}をうつすらと開けると、高い天井に、広い空間が確認できる。何か薄い香水のような匂いもある。

少しすると、それは新調されたばかりの家具のような、あるいは新築の家のような建材の匂いだと感じた。

辺りは暗く、所々床にLEDライトやサイリウムが置いてある。

横を向くと、様々なデザインベッドが無数に並び、衛生兵たちが動き回っているのが見えた。

自分も、そのベッドに寝ているようだった。

思考がだんだんはつきりしてくると、負傷兵が上げていると思しき不快な悲鳴^{ふかい}や、兵士たちの叫び声も聞こえてくる。

ここは、負傷兵を収容する野戦病院のようだ。

傍^{わら}らには、飛行服姿の女性士官がいた。パイプ椅子^{いす}に座り、輝度^{きど}を落としたタブレット端末を弄^{いじ}っている。

大尉が、毛布^{めく}を捲^{めく}って姿勢を変えると「お目覚めですか？」と相手はタブレット端末から視線を上げて話しかけてきた。

「……僕は、負傷兵じゃない。少なくとも、負傷

はしなかつたはずだが」

そう応えてから、大尉は起き上がろうとした。

だが、軽い目眩を覚えて、一瞬意識が遠のく。

「ゆっくりと身体を起こしてください。……お水をどうぞ」

女性士官は、足下に置かれた段ボール箱の中から、ペットボトルを取り出して差し出してきた。

エビアンだったが、北京語のラベルが貼られている。

「なんで、こんなものが」

「この兵站は、まだ保たれています。正直、エビアンを箱詰めですべて送ってくる余裕があったら、兵隊と弾を届けてほしいのですけど」

女性士官は、ここで自己紹介をしてきた。

名前は韋慕青少尉で、武装ヘリ部隊の唯一の女性搭乗員だ、とのことだ。

「なぜこんな所に？ 負傷しているようには、見

えないが」

「私のことですか？ まあ、負傷していると云えば、そうなんですけどね。でも、たいしたことではありません。撃墜されて、少し足首を捻った程度だから。その後も出撃して、また墜落させられただけで、私、悪運が強いらしくって」

確かに、彼女は今軍靴ではなく、サポーターを巻いた裸足にサンダルを履いていた。

「ここは、どこです？ 負傷してもいない自分が、どうしてここに？」

「貴方は……ちよつと暴れたので、強い鎮静剤を投与されました。軍医の話では、そのせいで記憶に混乱が起こるだろうとのこと。まずここは、長崎です。大村という空港がある街で、海上空港から陸地へ渡り、海上自衛隊基地のすぐ隣にある巨大な家具屋の中です。空挺の指揮所は、すぐ隣にある物流センターを借りています。最初は

空港の中にあつたけれど、野砲の攻撃を受けたので、内陸部に引つ越しました。……それで、大尉殿は、大きな怪我けがこそしていませんが、擦り傷きずやRPGを発射したときの小さな火傷やけどをあちこち負っていて、その治療ちりょうのため、この野戦病院に担ぎ込まれました。そこで、戦場に戻せと暴れたので、薬で眠らされたと私は聞いていますよ」

段々と記憶が戻ってきた。

自分は、八代市内で、一個小隊を率いて戦っていた。敵陣の中で孤立し、白旗を掲げようとしたが果たせず、戦闘を繰り広げつつ逃亡しているうち、いつの間にか祖国そこくで英雄えいゆう扱いをされていたのだ。そして、英雄になった自分たちを救出するために、味方が大部隊を展開した。

結果的には、その味方の大きな犠牲により、自分を含めたほんの数名が助け出された。

「……僕の、部下たちは？ まだ、八代に残って

抵抗していたはずだ。というか、僕は何時間くらい寝ていたの!？」

「ええと、順を追って説明します。まず大尉殿は、丸一日近く眠っていました。一緒に脱出した韓童インドン曹長は、お元気です。貴方のお供として、中央電視台のインタビューなどを受けてました。それで、ええと……」

少尉はタブレット端末に視線を落とし、輝度を上げてから、動画を一本見せた。

「これが、今夜のトップ・ニュースです。解放軍の英傑えいけつ・汪文思大尉、部下とともに無事戦場を離脱。空挺が決死の救出活動を行い、八代での作戦は大勝利に終わる——！ と、そんなところですね」

「大勝利!? 僕一人を救出するために、空挺は一〇〇名近い犠牲を払ったんだぞ……。それに、本隊の司令部は、あの時包囲されて全滅しかけてい

た……」

「いいじゃないですか。本隊の残存部隊は、八代市内から山中へと転戦し、森の中で持久戦を継続するとのことですよ」

「戦力はどのくらい？」

「さあ、二〇〇〇もないでしょうが、一〇〇〇名程はいるはずですよ」

「万の単位で上陸し、戦車だって何十両も持ち込んだのに。……それが、全滅したんだぞ?!」

少尉は、腑ふに落ちないという表情だった。

「そうそう、戦車といえば、自走高射機関砲を率いて大尉殿とともに戦った人民解放軍の誉ほまれ!と言われている余凡ユイファン中尉ですが、政府は、国際赤十字を通じて、士官としての正当な待遇と、速すみやかなる解放を日本政府に求めるそうです」

「人民は本当に、八代の戦いで勝利したなんて信じているのか?!」

「はい。着陸したヘリから大尉殿が降りてくるシーンが、こうして何度も繰り返しテレビで流れていますし、余凡中尉が投降した時、敵の士官と交わした英語のやりとりも、北京語に吹き替えられ、はっきりなしに流れています。あれはちよつと痛快でしたね。地面に膝ひざをついて頭の後ろで両手を組めという脅おびしに対して『自分は士官だから士官として扱え!』と英語で一喝いっかつしたシーンは。ご存じですか? 会話は全部、スマホのマイクに拾われて、中国全土に生放送されていたんですよ」

「信じられない……。われわれは負けたのに、人民の誰も、その真実を知らないなんて……」

「大衆というのはいつも、信じたい情報に飛びつくものでしょう。誰も、責められない。それに、日本も積極的に否定する気はないようです。というのも、軍は、八代を核兵器かくで焼き払うと脅おびしたらしくて、もし事実がが公おおになれば、核兵器使用

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。